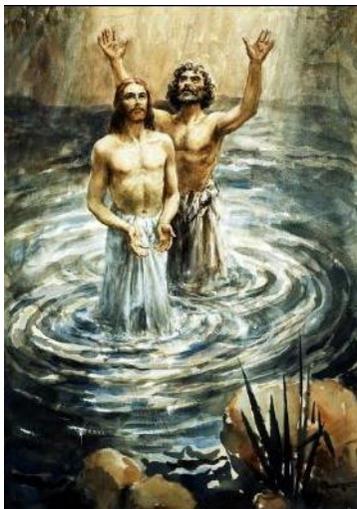


「ヨハネの福音書」について

今朝は一回限り、ヨハネの福音書を学ぶのですが、この書はイエス・キリストの弟子であった、使徒ヨハネによって記された福音書です。ヨハネがパトモス島とあって、90歳ごろに記した書と言われます。

マタイ、マルコ、ルカという福音書が共観福音書と言って、共通の記事が多いのに対し、この書は少し視点が異なっています。今朝学ぶ、冒頭の書き出しも少し哲学的で、いったいこれから、どんなに堅苦しい文書が連なっていくのだろうか、と思わせたりする面があります。しかし、1章後半からは極めて具体的なキリストの生涯やそのお言葉、説教が記されていくのです。他の福音書も概ねそのような傾向がありますが、イエス・キリストの最後の一週間、すなわち十字架と復活とその周辺の説教についての記事は、全体の五分の二ほどを占めています。

この福音書には、イエス・キリストの誕生の次第については記されていません。しかし、今朝読む箇所には、キリストの誕生の重大な意味について、記されているのです。老ヨハネが、生涯をかけて伝えてきたキリストについて、一つ一つの言葉をかみしめるようにして、記しているのです。



2020年12月6日 説教「ことばは人となって」

ヨハネの福音書 1章 1～14節

12月は創世記の「ヨセフの生涯の学び」をお休みして、主のご降誕に関連して聖書を開いていきます。今朝はヨハネの福音書1章からです。

1. 初めにことばが (1～5節)

①ことばは神であった (1～2) **「初めに、ことばがあった。ことばは神とともにあった。ことばは神であった。この方は、初めに神とともにおられた。」**ここにある「ことば」というのは「言葉」ではありません。ギリシャ語ではロゴスです。ロゴスは、絶対者、知恵に満ちた存在、永遠なる方といった意味で、言葉という意味も含まれています。そのような存在である「ことば」(ロゴス)なる方は初めからおられた方なのです。そして、その方は神(セオス)とともにあったというのです。そして、その方は神であったといえます。この方は、最初から神とともにおられたとあります。つまり、明らかにロゴスは「言葉」ではなく、生きる存在であるのです。そして、神ご自身なのです。

②すべてを造られた (3) **「すべてのものは、この方によって造られた。造られたもので、この方によらずにできたものは一つもない。」**この方(「ことば」である方)は創造主であるというのです。この方によって、すべてのものが造られたとあります。つまり、創世記1章に記されている創造の御業はこの方によってなされたというのです。聖書の神は三位一体の神ですが、その一位格をしめるお方なのです。

③この方にいのちが (4～5) **「この方にいのちがあった。このいのちは人の光であった。光はやみの中に輝いている。やみはこれに打ち勝たなかった。」**この方にいのちがあったとありますが、「いのち」という言葉はゾーウェー(永遠の命)のことで、この方のうちにそのいのちの源があったということです。そして、そのいのちは、人間にとっては光となるのです。罪にまみれた闇夜を明るく照らす光であり、その光はどこまでも輝いているのです。罪が支配する闇夜がどんなにしぶとかったとしても、その闇は、この光には勝つことができないのです。

2. バプテスマのヨハネ (6～8節)

①神から遣わされた人 (6) **「神から遣わされたヨハネという人が現れた。」**ここに出てくるヨハネはキリストの弟子のヨハネではありません。バプテスマのヨハネです。彼は、「らくだの毛で織った物を着て、腰に皮の帯を締め、いなごと野蜜を食べていました。」(マルコ 1:6)。清貧な生活をする最後の預言者と言われる人物です。ザカリヤとエリサベツの間に生まれた子です。この人はイエス・キリストが宣教を始める前に、道備えのようにして福音を説き、バプテスマをヨルダン川などで、信じる者たちに授けていたのです。

②光について証する人 (7) **「この人はあかしのために来た。光について**

あかしするためであり、すべての人が彼によって信じるためです。」人々はヨハネの高潔な様を見て、彼こそがメシヤ（救い主）ではないかと言っていました。しかし、ここには「この人は光についてあかしのために来た」とあります。光とは、5節にある方のことです。「ことば」（ロゴス）であり、「いのち」であり、「光」である方を証しして、その方を信じるようにと語るために来たというのです。

③光ではない (8) **「彼は光ではなかった。ただ光についてあかしするために来たのである。」**ヨハネ自身、こう言っています。「私には、かがんでその方のくつのひもを解く値打ちもありません」（マルコ 1:7）と。彼自身は光ではなく、ただ光である方をあかしするために立たされている者であると言っているのです。月が太陽からの光を反射させているように、ヨハネは光なる方を証する人だったのです。

3. 光は世に来た (9~14 節)

①世に来ようとしていた (9~11) **「すべての人を照らすそのまことの光が世に来ようとしていた。この方はもともと世におられ、世はこの方によって造られたのに、世はこの方を知らなかった。この方はご自分のくんに来られたのに、ご自分の民は受け入れなかった。」**それはすべての人のいのち、罪を含めた人生を照らし出すまことの光なる方なのです。この方は、この世界と人間をも造られた方なのですが、この世の人々はこの方を受け入れなかったのです。この世界を造られた方なのに、この世の民はこの方を知らず、この方を受け入れようとしなかったのです。

②その名を信じた人々 (12~13) **「しかし、この方を受け入れた人々、すなわち、その名を信じた人々には、神の子どもとされる特権をお与えになった。この人々は、血によってではなく、肉の欲求や人の意欲によってでもなく、ただ、神によって生まれたのである。」**世の人々がこの方に背を向けるなかで、この方を受け入れる人々は、神の子どもとされる特権を与えられるのです。この名を受け入れた人々というのは、主の御名を信じる者達です。この人々が新しく生まれたのは、決して人間の側の知恵や力や欲求によってではなく、神の備えに基づき、主の不思議なる御手に導かれて、イエス・キリストを信じた者たちは神の子とされるという特権を与えられるのですが、それは人間の側から出たのではないのです。

③私たちの間に住み (14) **「ことばは人となって、私たちの間に住まわれた。私たちはこの方の栄光を見た。父のみもとから来られたひとり子としての栄光である。この方は恵みとまことに満ちておられた。」**ことば(ロゴス)は人となり、人間が生きる地上で住まわれたのです。人間はこの方の天にある栄光というものを見たのです。人間が決して放つことのできない栄光です。この方は、神からの恵みとまことに満ち溢れておられました。

《結論》

神は無限の方です。人間は有限な存在です。本来なら、双方は決して交わり合わないのです。つまり、無限というのは限界がないのですから、限界のある世界とは別なものです。無限なる神が有限のなかに入るならば、もはや神ではなくなってしまうはずですが。

少し理屈っぽいのですが、このことを語らないと、今朝の聖書箇所理解が不十分になりますからあえて語りしたいと思います。ことば(ロゴス)なる方は神とともにあって、神ご自身であったとありますね。そして、その方はすべてのものの創造者でもあると記されています。そのような永遠にまします方が、「ことば」(ロゴス)なる方なのです。そして、そのロゴスなる方が 14 節を見ますと、「ことばは人となった」とあるのです。つまり、永遠にまします方が、有限の世界の人となって来てくださったというのです。そして、人間の世界に住んでくださったというのです。

この「ことば」なる方とはどなたのことですか。もう言うまでもありません。その方がイエス・キリストです。「ことば」なる方は、いのちの源であり、闇を照らす光でもあったとあります。そうです、イエス・キリストは永遠の神であり、いのちの源で、光である方です。その方が私たちの生きる世界に来てくださったのです。それを、使徒パウロの表現によるならば、「キリストは神の御姿である方なのに、神のあり方を捨てられないとは考えず、ご自分を無にして、伝える者の姿をとり、人間と同じようになられた」(ピリピ 2:6-7) のです。神である方が人間のかたちをとってくださったのですから、これ以上の謙遜はありません。いかに人間としての高潔さを持っていても、バプテスマのヨハネとは根本的に異なる存在であり、ヨハネもそのことをよく知っていたのです。

それでは、どうしてイエス・キリストは人のかたちをとって、この世にお生まれくださったのでしょうか。それは罪に染まり切った人間を闇夜から救い出すためです。いかなる他の方法をもって、人間は救えないことから、「ことば」なる方(神)が人の世界に来てくださったのです。そして、その方が私たちの罪の罰を身代わりとなって、十字架上で死んでくださることによって、人間が救われる道を開いてくださったのです。それほどに人の罪は奥深いということです。そして、人は善行や功績や金品などによってではなく、ただこのキリスト(救い主)を信じることによって救われて、神の子とされるのです。

クリスマスというのは、サンタの登場や、プレゼント交換などがあって楽しいのですが、主なる神からの最高のプレゼントである主イエス・キリストのこの出来事を知らないでは、本当の喜びを味わうことはできないのです。今朝、私たちもう一度、イエス・キリストが私たちのためにお生まれくださったことをかみしめて、この方を信じ、心から感謝と

喜びをもって、この方の誕生を待ち望んでいきましょう。